國學院大學学術情報リポジトリ

ヌシ伝承と治水事業：見沼・印旛沼の事例から

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Ito, Ryouhei メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000116

ヌシ伝承と治水事業
—見沼・印旛沼の事例から—

伊藤龍平

はじめに——ヌシのいる文化史——

日本人と自然との関係を考えるヒントとなるヌシ（主）伝承の総論については、先般、拙著『ヌシ　神か妖怪か』にまとめた。[1]

ヌシとは、長い年月、同じ場所に棲み続けて巨体になり、霊的な力を持つようになった動物のことである。[2]留意すべきは、ヌシ化の過程で、死というプロセスを経ていないことだ。動物は死んだあとヌシと化すのではない、ただ、生き続けることによって、別の何かになる——ヌシの伝承の背景には、そうした観念がある。この法則を植物に当てはめると神木の生成過程に、器物に当てはめると付喪神の生成過程となる。この法則は人間にも当てはまり、老人はしばしば神秘性を帯びる。

全国の事例に当たると、ヌシが生成するのは、河川沼沢などの水域が多いことが分かる。とりわけ水の流れが停滞し、淀んだ場所をヌシは好む。河川でいえば、淵や滝壺にヌシは棲み、早瀬や浅瀬には棲まない。この条件さえ満たしていれば、池、堀、井戸などの人工的な水域にもヌシは棲むようになる。深山幽谷や古城廃屋にヌシが生成することもあるが、やはり空気の

淀みがある場合に限られる。

ヌシになる動物には傾向が見られる。ヌシ化する確率が高いのは、蛇、魚、亀、蟹などの水棲動物である。想像上の存在である龍も水棲動物の範疇に入れられるだろう。ただし、ここでいう「水棲」というのは伝承上の生態であり、実際の動物の生態とは必ずしも一致しない。蛇もそうだが、例えば、蜘蛛や牛など、実際の生態では水と関係の薄い動物でも、ヌシ化するケースは多い。[3]

私がヌシの伝承を重視する理由は、ここに自然と人間の共生のヒントが隠されていると思うからである。ヌシはテリトリーを作って、その中に籠る。ヌシの側がテリトリーを離れて、人間の生活圏を脅かすことは基本的にはない。[4] 人々から怖れられているヌシも、テリトリーにさえ近づかなければ安全な存在だといえる。事例を紐解けば、両者の諍いは、人間の側による領域侵犯が原因であることがほとんどである。テリトリーを犯した者に対するヌシの報復は苛烈で、当該人物はもちろんのこと、その家族全員、果てには共同体の成員すべてに及ぶ場合がある。現代の公害問題において、一部の不心得者の行動が、地域全体の汚染につながるのと同じである。ヌシは自然のメタファーなのである。

要するに、棲み分けさえできていれば、ヌシと人間は共存が可能なのである。しかし、ヌシの多くが水域に棲み、人間の生活に水が欠かせない以上は、両者がまったく接点を持たずにいるのは難しい。ヌシ伝承の背景には、人間の自然開発の歴史がある。

本稿では、各論として、見沼（現在の埼玉県さいたま市見沼区ほか、複数の自治体に跨る）のヌシ伝承を、都市伝説「タクシー幽霊」との関連も含めて捉えたうえで、近世の関東地方の治水政策史と重ね合わせて考察する。何故なら、説話や信仰方面の研究の観点からの考察だけでは、伝承の背景にある人間と自然の関係——具体的には、治水等に関わる土木事業（堤防・遊水池・用水路・水田などの開発）の歴史が見逃されがちだと思われるからである。もとより、それは説話や信仰関連の先行研究の視角を否定するものではなく、かえって補強するものである。実験的な試みではあるが、本稿を通して、新たなヌシ論への道筋をつけてみたい。

一、「タクシー幽霊」とヌシ

最初に紹介するのは、『川口市史　民俗編』に載る事例であ

る。[5] 人とヌシとの関係を考えるうえで示唆的であるが、これまで参考程度に取り上げられることはあっても、[6] 積極的に考察の対象とされたことはなかった。

例①　見沼の主が大蛇であるとして、さまざまな伝えを生んでいる。まず差間では見沼が開発されて間もないころの話として次のように伝えている。ある時、一人の車夫が客を送って空の人力車を引いての帰り道、突然目の前に現れた美しい女に「成田詣ででもしようと思うので、千葉まで乗せていって欲しい」と頼まれた。車夫は快く承知して女を乗せて道を急いだ。ところが印旛沼の辺りまで来たところ、急に車が軽くなったので不思議に思って振り返って見ると、女の姿は車から消えていて、座席がぐっしょり濡れ、青くさい匂いが漂っていた。さては見沼の主の大蛇が開発によって棲めなくなったので、姿を変えて印旛沼に移ったのだろうと村人はうわさし、そのこと以来、見沼の大蛇を見たものはいないと伝えている。

一読して分かるように、典型的な「タクシー幽霊」の話が、見沼（現在の埼玉県さいたま市見沼区）のヌシの話となっている。なお、見沼は現存するものの、その大部分は埋め立てられ、調整池としてわずかに往時を偲ばせるのみである。

人力車が登場したのは明治初期、以後、路面電車やタクシーに取って代わられるまで、都市部の公共交通機関の花形だった。[7]「タクシー幽霊」の前段階というべき人力車怪談は報告例が多く、すでに常光徹や一柳廣孝による論考がある。[8] 常光が紹介したのは、一八七五年頃の『大阪日日新聞』に載った例で、人力車に乗ったのは疱瘡神（小児の姿をしている）だった。一方、一柳が紹介した例は、一八八〇年七月二三日付『西京新聞』の記事と、一九一三年一二月四日付『やまと新聞』の記事で、前者では狸が、後者では狐が、女の正体となっている。

「タクシー幽霊」の類話は世界各地で報告されており、それぞれが地域性を反映した内容となっている。アメリカの民俗学者ジャン・ハロルド・ブルンヴァンは、この話型を「消えるヒッチハイカー」と名づけたが、[9] ヒッチハイクという点にお国柄が表れている。また、アメリカの例では、幽霊が予言をする点や、幽霊にローリーなどの名前がある場合がある点に特色がある。ハワイでは火の女神ペレが、ドイツでは大天使ガブリエルが車に乗り込むという。[10] 私が聞いた例では、台湾の幽霊はタクシーに乗った後、きちんと乗車賃を払って降りるが、運転手が確認

すると、それは銀紙（冥銭。死者が使う紙幣）だったという展開になる。中華圏に多い鬼市（幽霊たちの集まる夜市）に迷い込んだ人をめぐる怪談に見られるモチーフの現代的な変容である。[11]

そうしたなかにあって、「幽霊以外の異類（妖怪・神仏・動物）が人力車に乗る」というのは、日本の「タクシー幽霊」に特徴的なモチーフとして指摘できよう。加えて、日本の事例に特徴的なのは、謎の女が去ったあと「シートが濡れていた」というモチーフである。例①の話でも人力車の「座席がぐっしょり濡れ、青くさい匂いが漂っていた」とある。

日本の「タクシー幽霊」は、後半の展開によって二種に大別できる。[12]次に、話型化してみた。

(1)　夜の町を流していたタクシーが、若い女を乗せる（場所は、墓地であることが多い）。

(2)　女が行き先を告げ、タクシーが走り出す。

(3) a　バックミラーに、座っているはずの女が映らない。不審に思った運転手が後ろを見ると、女は消えていて、シートが濡れていた。

b　目的地の家に着いた女が「財布を忘れたので取ってくる」と言うので、運転手は車を停めて待っているが、いつまで経っても戻ってこない。運転手が家の玄関先まで行くと、その女の通夜をしているところだった。

(3)bの展開ならば、女の正体は幽霊以外に考えられない。しかし、(3)aの展開の場合、女の正体は最後まで謎のままである。拙著『ヌシ』において、私は、このケースにおける「シートが濡れていた」というモチーフは、女の正体が水棲のヌシであるのを暗示しているのではないかと指摘した。[13]例①の話では、座席が「ぐっしょり濡れ」ていただけではなく、「青くさい臭いが漂っていた」とも話されている。実際、全国の報告例を見ていくと、池沼から池沼へと移動中のヌシに頼まれて、人間が道案内をするという話は少なくない。[14]

ヌシという語こそ用いていないが、この観点から「タクシー幽霊」を論じたのが、山田厳子と堤邦彦である。山田は水神の移動という側面から考察し、堤はこれを仏教説話の現代的展開と捉えた。[15]ヌシが池沼から池沼へと移動する話は多く、その過程で、人が道案内をしたケースも少なくない。[16]道案内の際に、人間の男がヌシの女を負ぶるケースでは、人が前方に、ヌシが後方にいるという位置関係が「タクシー幽霊」に類する。[17]見沼と同じ関東地方の例では、善福寺池のヌシが井の頭池に移動する際に荷車に乗り、[18]熊野神社のヌシが三宝寺池に移動する際に

人力車に乗っている。[19] ヌシには神仏としての面もある。幽霊が車に乗るというから奇異な印象を受けるが、神仏が乗り物に乗るのならば、神輿渡御がそうであるように、珍しいことではない。

もう一例、『川口市史　民俗編』から引用する。[20]

例②　東内野でも似たような話を伝えている。内野村の百姓蓮見左之次郎なる者が馬の背に野菜を積んで売りに行った帰り、千住大橋の渡しを越えてじきのところで、一人の若い女に出逢った。その女は「これから見沼の方へ行きたいのだが、歩き続けて難渋している。日も暮れてきたし、途中までいいから馬に乗せてくれないか」と手を合わせんばかりに頼むのであった。左之次郎は気の毒に思って馬に女を乗せ、やがて見沼の三弁天の一つ、山口の弁天の所まで来た。するとそれまで一言も言わなかった女は「ここでいいから降ろしてくれ」という。不思議に思ったものの、それではと手伝って降ろしてやった左之次郎に、女は「何のお礼もできないが、これを差しあげる。しかし決して中を見てはいけない」と、おひねりのような紙に包んだものを出した。そんな心遣いはいらないと辞退したが、女は無理に押しつけて行ってしまった。左之次郎は包みを懐に捻じ込んで、それにしても不思議な女だったと、ふと馬を見ると相当重い荷でも運んだ時のように、その背中は汗でぐっしょり濡れている。手拭いで汗をぬぐい取り、ともかく家路を急ぐことにした。家に帰りついて馬を休ませ、懐の包みを神棚に供えたものの、女の別れ際の「決してみるな」ということばが気になりだした。思い切って神棚の紙包みを開いてみると、二銭銅貨ぐらいの大きさの蛇のウロコが二枚入っていた。さては、あの女は見沼の大蛇であったかと薄気味悪さに身震いした。後日、左之次郎からこの話を聞いた村人は、見沼開発後、印旛沼に移ったといわれた主の大蛇がなつかしくなって帰って来たのであろうかと、ひとしきりうわさしたものであった。

ここでは人力車ではなく、馬の背中が「汗でぐっしょり濡れて」いる。加えて「二銭銅貨ぐらいの大きさの蛇のウロコが二枚入っていた」ことが、女がヌシである証拠となる。弁天が水神信仰と結びつくのは言わずもがなである。[21] また、馬も神仏の乗り物とされてきた。留意したいのは、例①でも例②でも、ヌシの移動の理由に見沼の開発が挙げられている点、そして移動

先が印旛沼とされている点である。

二、見沼から印旛沼へ

最初にヌシの条件として一つ所に籠っていることを挙げたが、その実、ヌシたちは存外に社交家だった。池沼から池沼へと移動するヌシの伝承も全国各地にある。移動の理由には、内的要因と外的要因とがある。[22]

内的要因とは、他所のヌシへの挨拶、異性のヌシとの逢引き、そして婚姻、散歩、物見遊山……等々のほかに、体が大きくなり過ぎて棲み家が手狭になったために引っ越しを余儀なくされたケースがある。いずれもヌシの側の都合での移動である。

外的要因とは、人間の行動によってヌシが移動を余儀なくされた、というケースである。人間が直接的にヌシを追い出したケースもあるが、間接的な理由で、つまり治水工事や水質汚染、戦火などによって棲み家を荒らされたヌシが、他の地域へと移動せざるを得なくなったというケースもある。

見沼のケースでは、干拓という外的要因によってヌシが棲めなくなり、引っ越しを余儀なくされている。話者たちも、「見沼の主の大蛇が開発によって棲めなくなったので、姿を変えて印旛沼に移ったのだろう」（例①）、「見沼開発後、印旛沼に移ったといわれた主の大蛇がなつかしくなって帰って来たのであろうか」（例②）と解釈している。

先に挙げた二例以外にも、見沼干拓が原因で棲み家を失って、印旛沼へと移動するヌシの話が二例報告されているので、次に紹介する。[23]

例③　見沼では蓮は作らない。見沼に竜が棲んでおり、中を歩くと蓮の殻で傷がつくからである。その竜は八丁下の四本竹というところにいたという。この竜のことを「見沼のゴイ」といった。この竜は見沼干拓以後は千葉の印旛沼に越したという。

例④　見沼がまだ沼であったとき、ゴイゴイという怪物が住んでいた。以下は鈴木伝左衛門氏（明治三十一年生）が子供のころよく聞いた話である。念仏橋から八丁の方に行くすぐ横の（この道は尾間木と大門の境となっている道である）道を少しいった所に、四本のくいがうってあって、清水が吹き出しているところがあった。そこに見沼のゴイゴイが住んでいるといった。だから近づいてはいけない。近づく

と引き込まれる。またゴイゴイは見沼が干拓されて住めなくなったので、千葉の印旛沼に行ったという。だから見沼の米を食っている者は印旛沼に行ってはならぬ。行くとひき込まれてしまうという。

例③は蓮の作物禁忌に、例④は米の食物禁忌に結びつけられている。[24] ゴイ、ゴイゴイとは妙な名だが、仔細は不明。魚類の中でもヌシ化しやすい鯉を指しているのではないだろうか。鯉は龍の前身で、琴高仙人（龍を捕らえるために鯉に乗っている）のように画題として好まれた。また、五位が緋色を指すことから、ゴイゴイは「五位鯉」の意味で、「緋鯉」を指す可能性もある。一方、例③の「四本竹」は、干拓前の見沼にあった氷川女體神社の祭祀場のことで、ここでヌシは祀られていた。後年、遺跡も発掘されている。[25]

江戸幕府の事業であった見沼干拓は、後述するように、地域住民の要望による面が大きかった。見沼の周辺地域の住人は、干拓によって、みずから祀っていたヌシを追い出したわけである。例④の末尾からは、見沼周辺の住民のヌシに対する原罪意識が仄見える。

見沼近郊の民俗を研究している宇田哲雄は、自身が収集した「見沼のゴイ」の話でも、やはり干拓後に印旛沼に移動していると報告し、さらに「浦和市野田の「鷺山」の鷺は、餌の魚を印旛沼まで取りに行ったと言われている。印旛沼の魚は腹の模様でそれと分かる」と述べている。[26] 宇田はこれを実際の鷺の生態として扱っているが、おそらくは、この話者の言葉そのものが伝承であろう。また、宇田は「かつてのこの辺の人々の交流や印旛沼への認識が問題になると思われる」と述べているが、問題提起に留まっている。

それにしても不思議なのは、見沼のヌシの話が、遠く印旛沼と関連づけられる例が多いことである。なぜ、見沼のヌシは印旛沼へ向かったのか。この問いへの答えは後にして、事例の紹介を続ける。次に注目するのは、干拓をした人物についてである。[27]

例⑤　次は赤山での話。赤山城跡の西北部にわずかに水を湛えたところがある。それは伊奈氏が勢力を誇っていたころの後苑の池であったという。昔、その池に伊奈氏が舟を浮かべていると山蛇が現れて「われは見沼の龍神である。汝が家のために棲むところを失った。その恨みは忘れない。必ずや汝の家に災いを為すであろう」と怒りの言葉を残して

水底に消えた。村人は永くこの水底に伊奈氏がその時舟遊びをしていた朱塗りの舟が沈んでいると信じてきた。

例⑥　井沢弥惣兵衛為永とともに見沼の開発にかかわっていた関東郡代伊奈氏は、見沼の主であるオタケ様という竜神に祟られ、家運が傾くなど災難が続いた。そこで家老は、氷川女体神社の池に移り住んでいるという竜神の霊を慰めようと、同社に祈願したところ、その後は、祟りはなくなったという。

例⑤も例⑥も、行き先は印旛沼ではないが、干拓によって棲み家を失った見沼のヌシが移動している。また、二例とも干拓を指導した人物（「伊奈氏」「井沢弥惣兵衛為永」）が、ヌシの祟りに遭っている。ヌシと闘った人間は、しばしば英雄視される。伊奈・井沢もヌシ退治の英雄の系譜に連ねられていた。しかし、次の例はいささか趣を異にしている[28]。

例⑦　見沼の干拓の準備に取りかかった井沢弥惣兵衛為永のところに、ある夜、美しい女が訪ねてきて、私は見沼の竜神であるが、この沼を干すのを延ばしてほしいと願った。気がついてみると女の姿はどこにもなかった。やがて、干拓の工事にとりかかると、思わぬ災難にあったほか、為永も病気になった。為永が寝ていると、またその女は現れ、私が病気を治してあげよう、そのかわり願いを聞いてほしいといい、毎夜その女は現れ、夜明けには姿を消した。為永の病気は、にわかに良くなった。ところが、ある晩、家来の者が為永の部屋をのぞくと、蛇身の女が為永の体をなめまわしていた。家来の者もそれには気を失い、為永もそのことを聞かされると肝を冷やした。為永は詰め所を万年寺（現大宮市片柳）に移した。万年寺でも、ひつぎが門をくぐろうとすると宙に舞い上がるというようなことが起こった。人々は、竜神が為永の仕打ちを恨んでの仕業に違いないと言いあったという。

ヌシと人間の関係が、抜き差しならないものであることが窺える話である。例⑦で注目すべきは、ヌシが見沼の干拓自体は受け入れている点である。そのうえで、「この沼を干すのを延ばしてほしい」と嘆願している。井沢弥惣兵衛が病に倒れた際には、病気の治療を交換条件に、嘆願を受け入れるように説得している。

昔話「もの食う魚」では、乱獲を中止させるためにヌシ（鰻や岩魚など）が人間（主に僧侶）の姿に変じて、魚介類の代表として人間との交渉に臨んでいるが、それを彷彿とさせる話である。[29] 例⑦ではヌシの側もかなりの譲歩をしているが、それでも干拓事業が継続されている点に、人間優位の時代の趨勢が読み取れる。

一連の話の主人公である「伊奈氏」（例⑤・⑥）と「井沢弥惣兵衛為永」（例⑥・⑦）が、見沼のヌシ伝承に印旛沼の名が挙がる理由を考えるヒントとなる。

三、治水家たちの伝承

まず「伊奈氏」についてだが、これは伊奈忠次（一五五〇～一六一〇）のことであろう。近世初期の代官で、武蔵小室藩の藩主も務めた。見沼干拓の他に、利根川東遷・荒川西遷などの治水事業に功績がある。その名は埼玉県北足立郡伊奈町に遺されている。もっとも、子の忠治も治水家で見沼干拓に関わっており、代官頭を務めている。この話の「伊奈氏」が子のほうである可能性も否定できない。[30]

次の井沢為永（一六五四～一七三八）は、さいたま市の郷土の偉人で、学習教材にもなっている。紀州藩の勘定方を務めていた人物で、紀の川の新田開発を行なった。その後、将軍・徳川吉宗に見出されて旗本となり、見沼代用水の開削・手賀沼の干拓、多摩川の改修など、多くの治水事業に関わっている。子の正房も治水家で弥惣兵衛を名のっているが、知名度から考えて、話の主人公は父・為永のほうであろう。[31]

伊奈忠次も井沢為永も近世を代表する治水家で、見沼干拓に大きな足跡を残した。[32] では、伝承の中で彼らはどのように描かれているのだろうか。史実上の人物としての伊奈忠次・井沢為永の事績や人となりと、伝承上の人物としての「伊奈忠次」「井沢為永」のそれとは必ずしも一致しない。それは例えば、史実上の西行と伝承上の「西行」が同じではないように。そして人々の心情が投影されているのは、伝承上の人物としての彼らのほうなのである。[33] 以上のことを踏まえて、見沼のヌシ伝承を見てみよう。

例⑤では「伊奈氏が勢力を誇っていたころ」とあるから、話の中の伊奈氏はヌシの祟りによって没落したとおぼしい。例⑥の伊奈氏は「家運が傾く」等の祟りに遭っているが、没落は免れている。一方、例⑦の井沢為永は祟りに遭うも、最終的には干拓事業を成功させている。例⑤・⑥のヌシと異なり、例⑦の

ヌシには、交渉の余地があった。

説話の中のヌシが治水家を排除できなかったのは、話者たちが、干拓が完了した見沼を見ていたからであろう。干拓という史実が動かせない以上は、ヌシの伝承もそれに応じた内容となる。また、伊奈より井沢の方が強く描かれているのも、井沢の干拓事業のほうがより広範で、かつ現在の見沼の姿に直結したものだからだといえる。

見沼の干拓は同地区の信仰にも変容をもたらし、さまざまな説話が生まれた。時系列を考えれば明らかだが、干拓ありきの信仰であり、説話なのである。

例⑥では、見沼のヌシが移住したのは印旛沼ではなく、すぐ傍にある氷川女体神社の池とされている。[34] 氷川女体神社の主祭神は奇稲田姫命。崇神天皇の時代に、出雲大社から勧請されたと伝わっている。重要なのは、もとは御旅所である見沼の水上で行なわれていた御船祭が、干拓後、磐船祭として形を変えて行なわれるようになったという点である。干拓事業によって、祭事は変更を余儀なくされたのである。[35]

例⑦では、井沢為永が万年寺（正式には萬年寺）を詰め所にしたとあるが、これは概ね史実とも一致している。萬年寺は曹洞宗の寺院で、開基年次は不詳。見沼溜井（後述）の時代に水害に遭って、現在の場所に移転した。そして話にもある通り、井沢為永の見沼干拓事業の際には詰所とされた。井沢為永の頌徳碑があるほか、現在も、見沼の竜神と井沢為永の霊を祀った祭りが、八月十五日に行なわれている。

また、周辺には弁天社が多く、その代表的なものを見沼七弁天、もしくは三弁天という。いずれも見沼代用水開削の際に祀られたという。干拓に関わった人物の個人が祀った社もある。例②で「山口の弁天」とあるのがそれである。

さて、見沼のヌシが印旛沼へ移動する話は、川口市（例①・②）や、さいたま市（例③～⑦）など、見沼周辺の住民の間で伝承されている。それでは、迎える側の印旛沼周辺の住民の間のヌシ伝承にはどのようなものがあったか。近世の例だが、『兎園小説別集』（曲亭馬琴・山崎美成、近世後期）に、次のような話が載っている。[36]

例⑧　老樹鳥獣の千歳を歴て霊あるもの、人もし、これを犯すときは祟あり。（中略）又、土民のうへにも是等の事あり。安永年中、下総印旛の沼を埋て、新田開発のおん催あり。元この事は平賀源内が方寸より出て、当時、御勘定奉行・松本伊豆守へ、云々と勧めしに起れり。かくて件の沼を埋

とせしに、昔より大蛇すみて、沼の主となりしよし、土民のいひ伝へ候が、違ざるや、さま〴〵の事ありて、数年に及べども成就せず。かくて天明中、平賀源内はいさゝかの事の怒によりて人に傷けしより牢舎して獄中に死亡し、又、松本氏は不良の御咎によりて、御役御免、知行も半減召放されて、小普請入逼塞仰つけられ、生涯赦免なくて病死しけり。これも世には、いんば沼の主の祟ならんといひ伝へ候。（中略）凡かくのごとくするときは必ず霊有。是を犯すもの、その祟なしといふべからず。

ここで名が挙がっているのは、平賀源内（一七二八～一七八二）と、松本秀持（伊豆守、一七三〇～一七九七）である。話の中では、ともに印旛沼の干拓計画に係わったためにヌシの祟りに遭い、不幸な末路を辿っている。

平賀源内については説明不要だろうが、干拓事業という点に限っていうと、田沼意次の庇護のもと、荒川の通船工事に関わっていた。ただし、史実では、印旛沼・手賀沼干拓事業には関わった形跡はない。[37] 松本秀持は幕臣で、田沼意次のもとで勘定奉行を務め、印旛沼・手賀沼の干拓事業を進めたが、田沼失脚とともに任を解かれた。[38]

治水家たちとヌシをめぐる伝承は、見沼・印旛沼周辺に散見される。では、干拓工事の実際はどうであっただろうか。次に、見沼の干拓史を概観する。

松浦茂樹は、見沼干拓史を、①「自然の時代」、②「溜池の時代」、③「田圃の時代」の三期に分けたうえで、さらに九つの時期に細分している。伊奈忠次の見沼干拓は「溜池の時代」に当たり、これを「農業用溜池の時代（一六二九年～）」としている。[39] 井沢為永の見沼干拓はその次の「田圃の時代」に当たる。

松浦は「田圃の時代」をさらに六期に分けているが、その最初に置かれるのが井沢為永の干拓工事による「水田の時代（一七二八年～）」で、その後の五期は第二次大戦後である（「市街化予備地の時代」＝一九五〇年～、「遊水機能重視の時代」＝一九六〇年～、「畑作への転換の時代」＝一九六九年～、「土地利用混乱の時代」＝一九八〇年～、「保全・活用・想像の時代」＝一九九五年～）。

巨視的に見ると、今日、奥東京湾と名づけられた古代の入海が、土砂の堆積によって埋まっていき、弥生時代に湿地帯（埼玉平野）となる。それを整備して溜池（見沼溜池）としたのが伊奈忠次、それから百年後に再整備をして用水路（見沼代用水）

を作ったのが井沢為永である。近世に見沼干拓事業を指揮した二人が、象徴的な人物として地域の記憶に刻まれて、その記憶がヌシ伝承に反映しているといえる。

ただし、見沼干拓が幕府の増産計画の一環であり、その象徴的人物が伊奈忠次と井沢為永だったとしても、そもそも事業が進められたのは、地元住民の要望が強かったという事実がある。井沢為永が現地検分をする前に、地元住民の手によって測量が終わっていた。この点を忘れてはならない[40]。

伝承文学研究の見地から注意しなければいけないのは、見沼のヌシ伝承が話された時代のことである。話の中の舞台は近世から近代となっているが、話が報告されたのは一九七〇年代後半から八〇年代前半にかけてである。先の時代区分でいえば、「畑作への転換の時代」が終わり、「土地利用混乱の時代」にかかる頃である。この時期は「タクシー幽霊」が盛んに話された時代でもあった。急速に都市化が進む中で、見沼の大部分は埋め立てられ、現在のさいたま市見沼区となった。住民たちは、急速に変わりゆく見沼を眼前に見ていた。「タクシー幽霊」とヌシ伝承が重なり合ったのには、そうした背景が指摘できる。

四、夜刀神の末裔

いささか突飛な物言いになるかもしれないが、私は、見沼・印旛沼のヌシ伝承は『常陸国風土記』（七二一年）に載る夜刀神説話の後日談だと捉えている。というのも、千数百年にも亘って続いている利根川水系の治水事業史と、その結果としての北関東の河川沼沢の変遷史を踏まえなければ、本稿で紹介してきたヌシ伝承の数々が生成した理由を説明できないからである。

次に、『常陸国風土記』の夜刀神説話の要約を載せる[41]。同説話は二部構成を取っているので、便宜的に前半（A）と後半（B）に分けた。説話の舞台となったのは現在の霞ヶ浦とその周辺に点在する湖沼群であるが、かつてこの一帯は香取海と呼ばれる広大な水域で、印旛浦（現在の印旛沼）と続いており、また、後年の見沼に相当する地域の湿地とも連なっていた。時を隔ててはいるが、比較の対象としては適切であろう。

A　継体天皇の御代（五〇七～五三一年）、箭括氏の麻多智という人が、郡より西の谷の草原を切り拓き、新たに田を作っていた。すると、夜刀神が群れをなしてやって来て、

田作りの邪魔をする。土地の者はこう言った――「蛇のことを夜刀神と言います。頭には角があります。その姿を見ると、家系が絶えてしまいます。この郡の野原には、たくさん棲んでいます」。

麻多智は怒り、甲冑を身にまとい、矛を手にして、夜刀神を打ち殺し、追い払ったのち、山の入り口に標の杖を立て、こう宣言した。

「ここから上は神の地とし、ここから下を人の田とする。これからのち、私は神職として永久に敬い、祀るので、どうか祟らないでほしい。恨まないでほしい」

その後、麻多智は社を設けて、祀った。麻多智の子孫はその後も祭祀を続け、いまにいたるまで絶えることがないという。

B　孝徳天皇の御代（六四五～六五四年）、壬生連麿という人がその谷を占拠し、池に堤を造らせた。すると、夜刀神が池のほとりの椎の木の株に集まってきて、いつまでたっても、去ろうとしなかった。麿は大声でこう言った。

「この池を修めるのは、民を生かすためである。どの神が、教化に従おうとしないのか」

麿が、土地の役人に「目に見えるものはすべて、魚虫の類はことごとく打ち殺せ」と命じたところ、夜刀神は去って行った。その場所は現在、椎井の池と呼ばれている。池の周りには椎の株があり、清泉が湧き出ているため、そう名づけられたのである。

説話Aは水田開発にまつわる伝説で、説話Bは堤防建設にまつわる伝説である。ともに夜刀神のテリトリーである水域を人間が侵すことによって生じた葛藤が物語られている。中国の禹王の伝説を引くまでもなく、[42] 古来、為政者にとって水を制することは治世の根本であった。治水が治世の大部分を占めるのは、洋の東西を問わない。

三浦佑之は、『常陸国風土記』の説話Aを「水田の開墾が「自然＝神」と対峙するものだった」と指摘したうえで、それが「「王権＝共同体」の始まりの時に水をめぐって生じた」と述べている。対して、説話Bには「村落的な王権を絡めとるようにして国家がかぶさってくる」のを読み取った。[43] 説話Aと説話Bを併読することによって、自然神である夜刀神が、人間によって制御され、支配されていく過程が浮かび上がってくるのである。そのように考えると、見沼以外であっても、各地の伝説に残る

河川沼沢のヌシたちは、その性質と説話の構造から『常陸国風土記』の夜刀神の末裔と見なせるのである。

見沼のヌシ伝承には、干拓について触れられたものが多い。例①～⑦のように、直接、見沼干拓が鍵になっていなくても、説話のどこかで干拓について触れられているのである。

例えば「見沼のヌシの笛」は「見沼がまだ干拓前の沼だったころのこと」と書き起こされ[44]、「椀貸し淵」説話でも「見沼干拓前は、毎年六月十五日に竜神祭りが行われた[45]」とある。また、別の話では「昔、三室（現在浦和市）の氷川女体社に「御舟祭り」といって、御本霊を舟にのせ、片柳地区の中川の氷川社下にしつらえた御旅所まで、お送りする古式があったが、享保年間（一七一六～三六）に見沼が干拓されてからは中止になってしまった[46]」とある。なお、この例では、干拓前に無数の光り物が見沼から飛び去ったとあるが、行き先については記されていない。

ここで、史実と伝承上の時代とは必ずしも一致しない点に注意しなければならない。一連の話で語られる「見沼が干拓される前」というのは、明確な史実上の時代ではなく、史実に基づいて生成した漠然としたイメージである。例えば、例①の「見沼が開発されて間もないころの話」というのが、先の松浦の時代区分でいう「溜池の時代」（伊奈忠次が指揮）を指すのか「田圃の時代」（井沢為永が指揮）を指すのか判然としないが、いずれにしろ、この時期に人力車は存在しない。逆に、人力車が全盛期だった明治・大正年間の見沼はどうだったかというと、干拓事業は一段落していて大きな変化はなかった。

柳田の提唱以来、伝説と歴史とは緊張感をもって対峙していた[47]。両者の相違については先学による議論がなされているが、紙幅の都合でここでは取り上げない[48]。私なりに相違点を挙げるならば、伝説は歴史と違って、複線的であり、点在もしくは偏在している点に特徴がある[49]。偽説をふるい落として真説を拾い上げ、一本の糸を紡ぎ上げるのが歴史ならば、矛盾し合う諸説をそのまま共存させるのが伝説なのである。重要なのは、見沼の干拓が、地域住民にとって、時代認識上の一つの画期になっていたという点である。

印旛沼のヌシ伝承では、見沼ほど顕著に干拓が語られることはない。何故なら、見沼と印旛沼とでは、干拓事業の結果に大きな違いがあるからだ。

次に、印旛沼干拓史を辿る。鏑木行廣は、印旛沼の歴史を四期に分けている。すなわち、①「香取海の一部、印旛浦（～中世）」、②「享保期（一七一六～三六）」、③「天明期（一七八一

～八九)」、④「天保期(一八三〇～四四)」の四期である。②と③は新田開発、④は水害防止と水運が目的であった。本格的な干拓が始まったのが近世からである点、干拓に際して地元住民の要望が強かった点は、見沼のケースと同じである。[50]

そして結果を見ると、近世における印旛沼の干拓はすべて失敗に終わったのである。

その後、安政五年(一八五八)、慶応三年(一八六七)、明治二年(一八六九)、明治九年(一七七六年)、明治一七年(一七八四)にも印旛沼の干拓計画があり、戦後には放水路設置の計画も立てられたが、いずれも実現しなかった。近代に入って、ようやく印旛沼の干拓は進められたが、それでも見沼のように全域が埋め立てられることはなかった。また、印旛沼放水路はついに計画倒れのまま、今日に至っている。[51]

見沼と印旛沼は、ともに利根川水系に属していながら、その後の運命は対照的だった。端的に言うと、見沼では人がヌシに勝利したのに対し、印旛沼ではヌシが人に勝利した。この事実が見沼周辺の住民の記憶となって残り、その結果、見沼から印旛沼へと移動するヌシの話が生じた、そう判断して大きく過つまい。

事実、印旛沼のヌシ伝承の中に、見沼との関連を説く話はいまのところ見出せていない。[52] 例えば、印旛沼のヌシが、移動してきた見沼のヌシを迎え入れたというような話は報告されていないのである。見沼のヌシが印旛沼へ移動した話は、見沼周辺の住人の心象風景の中にのみあった。ヌシを失った見沼周辺の住民と、ヌシとの共生を余儀なくされた印旛沼周辺の住民の意識の相違が窺えるのである。

おわりに——ヌシと人間の新たな関係——

最後に、現在の見沼周辺地域の住民のヌシとの関わり方について述べ、稿を閉じたい。

二〇〇一年から、さいたま市では、見沼のヌシをモチーフにした「さいたま竜神まつり」(旧称「見沼竜神まつり」)を催している。契機となったのは、大宮市・与野市・浦和市が合併して、さいたま市が発足したことによる。祭りの目玉は巨大立体凧「昇天竜」で、「干拓によって棲み家を失った竜神」が「雲を呼んで天に昇った」伝説に拠っているという。[53]

二〇〇二年からは市内の竜神伝説ゆかりの地を巡るウォークラリーを開始し、二〇〇三年には全国の自治体に声をかけて「竜サミット」を実現した。二〇〇八年には、さいたま市のイメー

ジキャラクターが、ヌシを模した「ヌゥ」に決定した。

また、郷土教育の中でも、地域を象徴するものとして見沼のヌシは取り上げられている。二〇〇八年刊行の『見沼と竜神ものがたり』は、見沼のヌシを軸とした児童向けの地域文化史で、井沢為永の干拓事業と、水利土木の技術史が分かりやすく解説されている。

二一世紀に入ってからの一連の動きを見てみると、かつて地域住民によって棲み家を追われた見沼のヌシが、新市政の開始とともに、地域振興のために呼び戻されたと位置づけられる。いまや見沼のヌシは、地域の象徴となりつつある。

見沼のヌシは信仰の対象であった。その一方で、見沼干拓も住民の悲願だった。これは矛盾することではない。ヌシに対する信仰は、たとえ畏敬の念に裏打ちされていたといっても、それは怒り（水害・干害）を回避するためのものだった。

最初に述べたように、人間の生活に水が不可欠である以上、ヌシの棲む水域と無縁でいるのは難しい。われわれの先祖はヌシとの付き合い方を模索してきた。拙著『ヌシ』では、ヌシへの対処法を、①退治する、②追放する、③生きたまま封じ込める、④神として祀り上げる、⑤契約を交わす、⑥ヌシのまま利用する……の六つに分類した。見沼のケースは、最初は④（祀り上げ）で、その次に②（追放）だったが、ここに来て⑥（利用）の段階に入ったといえる。しかし、観光資源としての「利用」は、従前のヌシ伝承には見られないものである。[54] ヌシと人間の関係の新たなる局面と言えよう。

今回は、見沼のケースを例に、北関東の利根川水系の治水事業史の中にヌシ伝承を位置づけてみた。ヌシ＝自然と人間との対峙は宿命であり、全国の河川沼沢に両者の相克の物語がある。今後は他地域におけるヌシ伝承を、地域ごとの治水始業史と絡めて探索していきたい。ヌシと人間は、ともにこの国の歴史を紡いできたのである。

注

（1）左記拙著は、ヌシを総括的に考察した最初の本で、全国二二二例のヌシ伝承を取り上げている。ただし、一般書という性格もあり、使用しなかった資料も多い。本稿で述べるヌシの特徴は、同書作成時の資料によって導き出されたものである。
伊藤龍平『ヌシ　神か妖怪か』二〇二一年、笠間書院

（2）基本的には動物がヌシ化する過程で死というプロセスを経ることはないが、一方で、入水した死者の霊がその場に残り、ヌシとなるケースも一定数ある。このケースでは、女性であることがほとんどである。

（3）水棲動物以外では、蜘蛛と牛のヌシの例が突出している。蜘蛛は糸を

吐くという性質が機織りに通じるため（水神は機織り女の姿で表象されることが多い）、牛は家畜として水田耕作に使役されるため、水と縁が深いと見なされていた。

（4）ヌシが自分のテリトリーを離れるのは、本稿二節で取り上げるようなケースである。

（5）川口市 編『川口市史　民俗編』（一九八〇年、川口市）第四章「伝説」（木村重利）より「見沼の主」。

（6）左記論考では、参考として同話が取り上げられている。
堤邦彦「水精の遺鱗――仏教唱導と民談の交流――」『世間話研究』一二号、二〇〇二年、世間話研究会

（7）齊藤俊彦『人力車の研究』二〇一四年、三樹書房

（8）常光徹「「偽汽車」と「消えた乗客」」常光徹『妖怪の通り道――俗信の想像力――』二〇一三年、吉川弘文館
※初出は、花部英雄 編『口頭伝承（ヨミ・カタリ・ハナシ）の世界』（『講座　日本の伝承文学』第一〇巻）二〇〇四年、三弥井書店
一柳廣孝「幽霊はタクシーに乗る――青山墓地の怪談を中心に――」一柳廣孝『怪異の表象空間　メディア・オカルト・サブカルチャー』二〇二〇年、国書刊行会
※初出は、一柳廣孝 監修、今井秀和・大道晴香 編『怪異の時空Ⅰ　怪異を歩く』二〇一六年、青弓社

（9）ジャン・ハロルド・ブルンヴァン著、大月隆寛・重信幸彦・菅谷裕子訳『消えるヒッチハイカー　都市の創造力のアメリカ』一九八八年、新宿書房

（10）ジャン・ハロルド・ブルンヴァン著、行方均・松本昇訳『メキシコから来たペット　アメリカの「都市伝説」コレクション』一九九一年、新宿書房

（11）伊藤龍平・謝佳静『現代台湾鬼譚　海を渡った「学校の怪談」』二〇一二年、青弓社

（12）左記著作では、第一部「人間　人間の話　死後の人間、主として幽霊、霊の話」の「1乗り物に乗ってくる異界の者」の項に、「タクシー幽霊、消えるヒッチハイカー」として同話型が立項されている。
渡辺節子『不思議な要素をもつ話、変な話　タイプ・モチーフ・インデックス「試案」』二〇一六年、私家版

（13）管見に入った限りでは、左記資料集に、ヌシの座った跡が濡れていたというモチーフがある。
妙高村史編さん委員会 編『妙高村史』（一九九四年、妙高村）所収「機具池の主」、小野忠孝・土橋里木 編『日本の民話　上州・甲州編』（一九七四年、未來社）所収「かなばち池の主」

（14）『ヌシ』では民俗資料報告書の類に載る事例のみに絞ったが、古典作品にも「人間がヌシを送る」というモチーフは多い。この点については、伝承文学研究会での発表（二〇二二年四月三〇日）の折に、徳田和夫氏からご教示いただいた。

（15）山田厳子「水神の移動――お姫坂の怪をめぐって――」説話・伝承学会（関西外国語大学三原幸久教授研究室）編『説話と伝承者』一九八九年、桜楓社
山田厳子「水と女の世間話――お姫坂の怪をめぐって――」『日本民俗学』一八〇号、一九八九年、日本民俗学会
堤邦彦　前掲（注6）

（16）人間がヌシの道案内をする話は、左記資料に見られる。これらの話の中のヌシは、雨の降る夜に女性の姿で現れることが多く、また、道案内をする人間は例外なく男性である。この点も「タクシー幽霊」に踏襲されている。
南魚沼郡誌編纂委員会 編『南魚沼郡誌』下巻、一九七一年、新潟県

南魚沼郡町村会
下島賢二・亀割竜二・福沢正紀・福沢俊之「下条村の伝説」伊那史学会 編『伊那』一九巻二号、一九七一年、伊那史学会
國學院大學民俗学研究会 編『民俗採訪　高知県幡多郡西土佐村　茨城県稲敷郡美浦村』國學院大學民俗学研究会
町田市文化財保護審議会 編『町田の民俗と伝承』第二集、一九九八年、町田市教育委員会
杉原丈夫 編『越前の民話』一九六六年、福井県郷土誌懇談会
杉並区立郷土博物館の解説板（出典不詳）
納所とい子「東京都練馬区大泉と新座市の昔がたり・聞き書き」『日本民話の会通信』五〇号、一九八三年 ※ 松谷みよ子 編『現代民話考3　偽汽車・船・自動車の笑いと怪談』（一九八五年、立風書房）に収録。

(17) この位置関係は、人間がヌシを背負う新潟県の巻機山の伝説に顕著に表れている。巻機山の伝説については『南魚沼郡誌』（前掲、注16）参照。また、左記論考に詳しい。
吉田裕美「巻機山の織姫伝説」の一考察——織姫と出会った男性の目の異常をめぐって——」『昔話伝説研究』二九号、二〇〇九年、昔話伝説研究会
吉田裕美「巻機山の織姫伝説」の諸相」國學院大學大学院文学研究科論集編集委員会 編『國學院大學大学院文学研究科論集』三一号、二〇〇四年、國學院大學大学院文学研究科

(18) 杉並区立郷土博物館の解説板　前掲（注16）
(19) 納所とい子　前掲（注16）
(20) 川口市 編『川口市史　民俗編』　前掲（注5）
(21) 見沼の弁天信仰については、左記著作に詳しい。
宇田哲雄「見沼地域周辺における弁天信仰の諸相と課題」松崎憲三先生古稀記念論集編纂委員会 編『民俗的世界の位相——変容・生成・再編——』二〇一八年、慶友社

(22) 左記拙著では、第六章「ヌシの社会」で、ヌシの移動について論じている。
伊藤龍平『ヌシ　神か妖怪か』前掲（注1）

(23) 浦和市総務部市史編さん室 編『浦和市史調査報告書』第九集、一九七九年、浦和市総務部市史編さん室

(24) 左記論文でも、見沼のゴイのことが取り上げられている。
宇田哲雄「見沼に蓮を作らない話——伝承という行為の一面——」『民俗』一四五号、一九九二年、相模民俗学会

(25) 四本竹については、見沼のヌシ（龍神）を祀った祭祀場という解釈が一般的だが、水利土木工事の跡という見方もできるのではないだろうか。若尾五雄の左記論考では、築堤工法の一種としてこれに類したものが取り上げられている。また、若尾は、岩手県水沢市の松浦作用姫と大蛇の伝説を調査した際に、四本柱という名の土地を訪れている。なお、若尾の記述については、林花音の発表によって知った。一つの可能性として、ここに記しておく。
若尾五雄「人柱と築堤工法」大塚民俗学会　編『民俗学評論』一八・一九号、一九八〇年、大塚民俗学会　＊のち、『金属・鬼・人柱その他　物質と技術のフォークロア』一九八五年、堺屋図書
林花音「水害伝承から見る多摩川——水害と治水のはなし——」二〇二二年、川崎市大山街道ふるさと館公開講座レジュメ

(26) 宇田哲雄「見沼の主の引っ越し——新田開発と民間伝承——」『浦和市史研究』一一号、一九九六年、浦和市史総務部行政管理課

(27) 例⑤は『浦和市史　民俗編』、例⑥は『大宮市史　民俗・文化財編』に拠った。

浦和市総務部市史編さん室 編『浦和市史　民俗編』（一九八〇年、浦和市）第十章「伝説」（青木義脩）第五節「見沼に関する伝説」

『大宮市史　民俗・文化財編』第五巻（一九六九年、大宮市役所）「伝説と巷説」※執筆者不明。

(28)『大宮市史　民俗・文化財編』（前掲、注27）

(29)ヌシと人間との契約については、左記拙著の第三章「ヌシとのつきあい方」で論じている。

伊藤龍平『ヌシ　神か妖怪か』前掲（注1）

(30)遠藤長一郎 編『見沼代用水沿革史』一九五七年、見沼代用水土地改良区

(31)青木義脩『井澤弥惣兵衛為永』二〇一五年、関東図書

(32)関東地方の治水事業に名を遺した伊奈忠次と井沢為永だが、水利土木工法の基本理念は対照的である。伊奈が氾濫を前提とした築堤をし、出水を滞留させるため、川を蛇行させる（関東流）のに対して、井沢は氾濫を防ぐ築堤をし、連続堤防で川を直線化し、固定させた（紀州流）。自然の改変の度合いという点では井沢のほうが大きく、それが伝承にも反映していると受け取れる。なお、関東流と紀州流の実態については諸説あるが、ここでは省略した。

大谷貞夫『江戸幕府治水政策史の研究』一九九六年、雄山閣出版

(33)本稿では、論を明確にするために史実と伝説を対比させたが、実際には、両者の関係は複雑で、史実とされてきた挿話が実は伝説だったということも珍しくない。左記著作では、井沢為永の事績にも伝説が混入してきていることに言及している。

中村勝『手賀沼開発の虚実「千間堤伝説」と「井澤弥惣兵衛伝説」の謎を解く』二〇一五年、たけしま出版

(34)本稿では深くふれられなかったが、氷川女体神社が見沼のヌシ伝承に及ぼした影響は大きい、遠藤長一郎は、左記著作において「古代における人間の居住地や土地の開墾を指定し得る他の指標として、神社及び仏閣をとりあげることが出来る」「三室の氷川女体神社は見沼溜井の南岸に突出した台地上に位置し、見沼溜井及び見沼代用水と浅からぬ因縁を持っていた」と述べている。氷川女体神社の立地そのものが見沼と、そしてヌシ伝承と関わり合うものだった。

遠藤長一郎 編『見沼代用水沿革史』一九五七年、見沼代用水土地改良区

(35)氷川女体神社では、見沼に祭祀場を設けて御船祭を行なっていた。しかし、見沼の干拓（一七二八年）後は、元の祭祀場の近くに新たな祭祀場を設けて、磐船祭を行なっていた。磐船祭は明治初年まで行なわれていたという。

井上香都羅『みむろ物語――見沼と氷川女体神社を軸に――』一九九八年、さきたま出版会

(36)日本随筆大成編輯部 編『日本随筆大成〈第二期〉』四、一九七四年、吉川弘文館

(37)芳賀徹『平賀源内』一九八九年、朝日新聞社

(38)『日本人名大事典〔復刻版〕』第五巻、一九七九年、平凡社

(39)松浦茂樹『荒川流域の開発と神社・in埼玉』二〇二〇年、さきたま出版会

(40)松浦は『荒川流域の開発と神社・in埼玉』（前掲、注38）の中で、見沼干拓における地元住民の役割を、次のように述べている。

　このように、見沼干拓をふくむ具体的計画が地元から練られ、既に実測も行われていた。地元による構想、あるいは実際の測量結果をふまえて、井澤がはじめて現地を検分した享保十年（1775）からでもわずか三年、また工事着手してからわずか1年で竣工をみたのである。見沼代用水路開削は、地元と一体となって行われた事業であった。

(41) 要約文は、左記著作を元に作成した。
秋本吉郎 校注『風土記』一九五八年、岩波書店
(42) 植村善博・治水神・禹王研究会『禹王と治水の地域史』二〇一九年、古今書院
(43) 三浦佑之『風土記の世界』二〇一六年、岩波書店
(44)『浦和市史　民俗編』（前掲、注27）
(45)『浦和市史　民俗編』（前掲、注27）
(46)『大宮市史　民俗・文化財編』（前掲、注27）
(47) 柳田國男の伝説観は『伝説』として、伝説の分類案は『日本伝説名彙』として一書にまとめられているが、民俗学と歴史学との対峙という問題が端的に表れているのは、一九二五年から雑誌『史学』誌上に連載された「史料としての伝説」である。
柳田國男『伝説』一九四〇年、岩波書店
柳田國男『日本伝説名彙』一九五〇年、日本放送出版協会
柳田國男『史料としての伝説』一九五七年、村山書店　※一九四四年に私家版として刊行したものを再刊したもの。
(48) 伝説の研究史については、左記論考に簡潔にまとめられている。
小池淳一「「伝説」という問い――その成果と可能性――」日本口承文芸学会 編『こえのことばの現在　口承文芸の歩みと展望』二〇一六年、三弥井書店
(49) ここで示した伝説観については、左記編著の第二章「村のいわれ」「解説」を参照されたい。
伊藤龍平 編『福島県田村郡　都路村説話集』二〇一五年、國學院大學説話研究会
(50) 鏑木行廣は、左記論考の中で、見沼干拓における地元住民の役割を、次のように述べている。
もともと、印旛沼周辺は洪水時に浸水被害が生じ、その影響は長期化しやすいところである。そのために地域の名主たちが干拓を企てるわけであるが、浅間山の噴火はこうした状況を悪化させたのである。
鏑木行廣「明治一七年の印旛沼掘割調査報告書について」村田一男先生喜寿記念論集慣行委員会 編『地域史の再検討　村田一男先生喜寿記念論集』二〇一七年、村田一男先生喜寿記念論集慣行委員会
(51) 栗原東洋『印旛沼開発史』第一部・上巻、一九七二年、印旛沼開発史刊行会
佐々木克哉「在地村役人の視点から見る天保期の印旛沼掘割普請」梶原健嗣「印旛沼干拓――変わりゆく干拓目的と変わらぬ干拓の重要性――」日本治山治水協会 編『水利科学』三七九号、二〇二一年
(52) 紙幅の都合で詳述は避けるが、印旛沼のヌシに関する話は多く、それらの中には印旛沼干拓にふれているものもある。次に、見沼とは無関係だが、印旛沼およびその付近の池沼のヌシの移動を説く話を紹介する。事例⑨は『成田市史』から、事例⑩は『印西町史　民俗篇』からの引用。
成田市史編さん委員会 編『成田市史』一九八二年、成田市
印西町史編さん委員会『印西町史　民俗篇』一九九六年、印西町
事例⑨　長沼ん主ちゅうのはよ、おらみたこともないけど。今開墾で米取ってべ。そこは沼になって魚だのよ、なんかいただよ、部屋みてえになって。
そっでそこに弁天様ちゅうのあっただよ。で、弁天様から、上福田のオサンガ池ちゅうのあっだよ。（主は）そこさ通っていただ。通っていたけんど一目にはかかんねえってそうだけんどな。
ほん山ん中のへっこんぼうにな、長沼ん者が木取りに入ぇったば、そこに、真黒になって、とぐろまいていたのを、松ぼっ

かだと思って（木を）とっていただっぺ。そしたら動き出したんだって。たまげて、それで、もどって死んじゃっただって。まさか、すぐでもあんめぇけど、長く医者にかかっていて治れねえうちに。

（新妻・南井）

事例⑩　貉池は現在埋め立てられてしまって、昔の面影がわずかしかのこっていませんが、そこを住まいとする、大きさ九尺位もある雌の大蛇が住んでいたんですよ。

また近くの谷津田の奥まった所には山崎池があって、そこはまあ昔の形をとどめていますが、そこの池にも大きな雄の蛇が住んでいたというんですよ。

この二つの池の主たちがときどきあいびきをしていたというのです。どこでかというと近くの「なかやらの釜」というとこなんですが、そこはしけったとこでいつも綺麗な水が湧き出ていてね、またここはおっぱいの形した石が祀らってて、この水を飲むと乳の出がよくなると、おっかさんがよく水汲みにきていたもんですよ。そんでここが二匹の大蛇のあいびきの場所だったんですね。

よく大雨、大嵐のあった後、稲がぐねぐねと倒さってんのを見かけるべ、あれが大蛇の歩った跡なんですよ。

貉池からまた山崎池からなかやらの釜まで続いていたそうですよ。

（木下　八三歳　女）

芽が指摘できるものの、近代以降の発想としてよい。

高谷重夫『雨乞い習俗の研究』一九八二年、法政大学出版局

※　本稿は、伝承文学研究会東京例会での発表「ヌシの行方――見沼・印旛沼の事例を中心に――」（二〇二二年四月三〇日）をもとに、まとめたものである。

（53）さいたま竜神まつり会 編『見沼と竜神ものがたり』二〇〇八年、さいたま竜神まつり会

（54）かつての民俗社会の中でのヌシの利用とは、旱魃の際に、ヌシの棲みかに汚れ物を投げ込み、わざとヌシを怒らせて雨を降らせることである。雨乞いの手法として、全国各地で報告されている。本文で指摘したヌシの観光資源としての利用は、遡れば、近世の名所図会にその萌